

コメント(田中)

保守単独政権の終焉

福田さんと、大平さんの、政界地図の前途に対する見通しの違いは、前者が、日本ではまだ自分、それもかなりの間、保守単独政権が続くし、また続かせるべきだという考えなのに対し、後者は、近い将来、自民党の単独政権は難かしくなると判断している点にあるといわれている。

この対談で、自民単独政権の将来性を問われたとき、大平さんは、その質問には直接答えないで、それよりはむしろ、政権をみる場合大切なのは、「その政権がどういう政党から構成されているかということではなく、どういう機能を現実にも果たしているか」にあるのではないかと述べている。そして、保守単独政権の場合でも、政権として十分機能できないこともあるし、逆に連立政権の形をとつても、スムーズに機能することもあって、要は単独とか、連立といった形式ではなく、政権として実質的にどう機能するかが大事なことだと強調している。

大平さんのこうした発言を、私は保守単独政権の終焉があり得る場合も考えているものと受けとっている。大平さんはそう考えているとみて間違いないであろう。だからこそ、形式論よりは、実質的機能を重視するのである。要するに大平さんの政界地図には、「多党化は現実の姿であり、これを踏まえねばならないが、しかし政治勢力が限りなく細分化され、バックボーンを喪失してしまつては困るので、将来とも、自民党は政界の中で、バックボーン政党の役割りを果たさねばならない」という決意があるようだ。

そこで自民の協力の相手として、公明、民社の両党がクローズアップする。公明党に対して、大平さんは、「ある意味の都市政党で、社会的な地位や財産に、比較的恵まれない弱者層を支持者として持つ政党」と規定する。このような公明党にくらべると、民社党は、民主社会主義といったイデオロギーの上に成立している政党だけに「ハイカラな西洋的なオリジンを持つ政党」とみている。

公明党が都市政党であるという点にからんで、私は米価や土地政策をみても判るように、日本の政党は左は共産党から、右は自民党まで、おしなべて農民党的な色彩が濃く、都市の住民は、その人口の大きい割には、政治的には、きわめて弱い発言力し

か与えられていないと質問したところ、即座に、「そんな考えはとらん」と反論された。

大平さんにいわせると、「日本では都市生活者といっても、農村に精神や生活の根っこを持つている」といい、「都市とか農村とかに分けて、これを対置して考えるのは、私は間違いだと思う。農村を基盤に持つ人が、日本の社会の力になっている」とさえ強調される。

大平さんは明治四十三年に、阿讃山脈が瀬戸内海の燧灘ひづなだを嘯む讃岐と伊予との境にある、人口約一万一千の豊浜町に、農家の二男坊として生まれている。生家は一町二三反の田畑を自小作する中農で、父親は村会議員や溜池の水利総代などの名譽職をしていた。明治生まれで、農村出身の大平さんが、農業や土に限りない愛着を持つことは、きわめて自然なことである。これは何も大平さんに限らず、明治生まれの日本人男性一般に通ずる共通のメンタリティかも知れない。そうした心理的な土壌があるからこそ、日本の社会はいまなお大きなムラ社会といえるのであろうが、大平さんは、この点について「農村社会では有権者と候補者の関係が濃密なのに対し、都会となると、両者の関係は疎遠になってくる。だから、政治の世界で都市が軽視されるという

のではなくて、有権者と候補者の関係が、薄くなるというのが正確ではないか。都市住民は、政治に対して積極的に関与するように考えなければ」ともいい切っている。都市住民の声が政治に反映しないのは、選挙制度の欠陥というよりは、都市住民と候補者の関係が、農村ほど緊密ではなく、都市住民の政治に対する関心や行動が薄くて弱いためであろうという。

工業化の進展と自民党支持層の先細りという、いまでは古典的になつた指摘については、大平さんは樂觀的なようだ。「そういう面も確かにある。過去二十年の経過をみると、産業構造の変化に伴い、かつて六〇%近くあつた自民の支持票が、この間に四十二%ぐらいに落ちているから、産業構造の変化が、得票に反映していることは事実だ。しかし、それでは、その間に労働組合政党といわれる社会党が産業構造の変化に比例して大きく伸びたかという点、これまた、自民と同じように、一〇%以上の大幅の転落を示しており、ではその票はどこにいったかという点と公明党、共産党、無党派層に流れ、とくに無党派層がふえた」と述べ、自民党の本当の敵は社会党や、他の野党ではなく、無党派層に対する対応こそが、これからの闘いだと強調している。自民党に限らず、すべての政党や政党人にとって、最大の脅威は、政治的無関心族の台

頭であろう。それは政治や政党がある意味では、魅力を失い、国民から見捨てられつつあることの反映でもあるからだ。

無関心層とからんで、女性や主婦の層についての大平さんの観察は面白い。「既成の特殊女性向きメニユーを用意しても、もうはじまらない。そんな簡単な調理では、もう間に合わない。そういう時代になってきた」という指摘は的を射ている。

自民党としても、この婦人パワーを、同党に取り込める具体策はまだないようだ。しかし、ここにわが国政治上の大問題があるということを、大平さんは党内で喧ましく吹聴して回っているというから、「婦人に愛される自民党」の出現も、まんざら夢物語りではないかも知れない。

右寄りの危険はない

国内の政治問題について、私がつとも大平さんに尋ねたかったのは、最近の社会の潮流をどうみるかという点にあった。時代の流れを見抜き、人心のおもむくところを把握、国民の渴望に訴える政策や理念を打ち出すことこそ、政界リーダーに課せら

れた使命であろうが、一体、いまの日本社会の流れを、大平さんはどのように把握しているのか。社会全般にみられる最近の特徴として私は、あえて復古的な兆しをあげ、これに対する大平さんの見解をきいたところ、「政治サイクル論」ともいうべき史観をあげて、「世の中には周期というか、政治にサイクルがあり、ある時期は非常に収斂的に政治が動くかと思つと、ある時期はそれとは反対に、発散的に政治が動くといふことがあり、林房雄さんの見解では、わが国においては、それが大体二十年だ」と答えてくれた。対談の中でも、大平さんは、この林房雄説を援用して、明治時代から今日までの、政治的振子の揺れ具合を描き出し、今日は、終戦後二十年間ぐらいの間の、全く手ばなしともいえる戦後デモクラシーの開放に対する反省気運が高まり、ひとつの収斂時期にきているのではないかと答えている。

私みるところでは、政界にあつて、こうした時代の風潮をいち早く嗅ぎとり、自ら風見鶏と称して、最近、ハッキリとタカ派的な発言と姿勢を打ち出しているのが中曾根康弘さんである。防衛問題をはじめ、憲法改正、元号法制化などに中曾根さんは、かなり大胆な発言を試みている。あるとき中曾根さんに会い、その真意を正したとこ

る、「自分も齡還暦をむかえた以上は、いまさら建て前論ではなく、これからは本音をドンドン喋りたい。心にもないことはいわないうもりだ」と答えていた。その言やよしである。中曾根さんの本音には、かなり右寄りのタカ派的なものがあると思われるが、時代が右に流れている今日は、その意味では中曾根さんにとっては本音を出しやすい時期である。問題は、時代が逆に向いたとき、中曾根さんに、相変わらず本音を買くだけの勇氣と信念がありやということであろう。

大平さんの政治思想や体質は、世俗的な色分けをすれば、「タカ派」というよりは、「ハト派」的色彩が濃いし、「対決」よりは、「協調」を好む氣質の持主といえよう。そしてイデオロギー的には、保守、革新という範ちゅうでは割り切れない、幅広いペラルな思想の持主というべきであろう。いまの時代の流れについては、もう少し、民主主義への反省が続くとみているようだ。しかし、だからといって、日本の社会が再び大きく右寄りに傾くことがあるとはみていない。「日本人というのは、政治的にみると、相当な平衡感覚の持主」というのが、大平さんの日本国民論である。

大平さんには、時代の流れに意識して便乗できるような器用さはない。そういうこ

とを照れるインテリなのである。また国民の先頭に立つて、これをリードするといった発想もないし、また意欲もないのではないか。むしろ、そうした行動に、*「危険な政治」*を感じる人なのである。ここまで政治的に成熟した日本国民というものは、一握りの政治屋などが、いかに煽動しても動くものではなく、結局、政治家というのは、国民の良識にまち、彼らをして自主的に行動させるための土俵作りに専念すればよいというのが、大平流の政治哲学であろう。

日本国民の政治的な成熟さを示す具体例として、大平さんは、ロッキード事件後の総選挙の結果をあげる。自民党に過半数の議席を与えながらも、なお自民党にそれほど多くの議席を与えず、反省をつながしたのは、なかなか心憎い処置であったという。国民一人一人が意図してやったのではないが、結果においてこうなったのは、日本が開かれた社会で、国民の政治意志が自由に表明されているからだ、と、大平さんは、自由社会のメリットを説いてやまない。